「総合人間学」構築のために(試論・その1) ―自然界における人間存在の位置づけ―

For the Purpose of Building a "Synthetic Anthropology" [Tentative essay, part1]:

Locating the Existence of Human Beings in the Natural World

古沢 広祐 FURUSAWA, Koyu

1. はじめに

人間存在への問いかけが、いまほど重い意味を帯びた時代はない。私たち人間という存在が何なのか、改めて人間の存在を問い直すことの意味を「総合人間学」構築の視点から考えてみたい。

物質・エネルギーの起源から人間社会、生物界、地球、宇宙の巨大構造までを認知しはじめた人類は、その認知能力と操作対象を自然の仕組みや生命の設計図(DNA)自体にまで拡張している。気候変動に対する気候システム管理(ジオエンジニアリング)研究から、遺伝子操作・合成生物学を隆盛させており、ロボット技術や人工知能の開発が近未来に人間の能力を超えるとの議論もある。

私たちがいま新しく認識できる世界は、素粒子の世界から宇宙まで含めた世界の全領域に広がってきた。宇宙論そのものの中でも哲学的な問いが浮上し、世界とは何か、あらためて自分たちの存在の意味が、根源的に問われ出している(認識主体としての「人間原理」の問い)。自分たちの存在状況を自ら認識しつつあるということ、それはいったい私たちにとってどんな意味をもつかが、深く問いかけられている(青木 2013, 松井 2017)。

たいへんに大きなテーマであり、本稿ではその序論として、簡単なエッセイ風のスケッチを素描することで 論点提示としたい。できれば各分野からのコメントを頂くことで、現代に求められている総合人間学の姿を、 順次探りだしていくことを試みたい。

2. 基本的な立ち位置と視点

まず学問のあり方として大きくは2つのタイプがある。問題を知り理解することに主眼をおく問題認識型と、問題に対する解決策を何らかの形で提示していく課題対応型である。一般的には基礎と応用ないしは理論研究と実践研究という立場の違いとして、とらえることができる。その点で、総合人間学をどちらの立ち位置として考えるか、あるいはどちらに比重をおくかで、学問のあり方に違いが出てくる可能性がある。学問的には2つのそれぞれの立場において、認識を深めていく意義はどちらにおいても大きい。

しかしながら、筆者の立場としては両者を含みこむ視点ないし方法論が重要だと考える。というのも、漠然とした問題意識で「人間とは何か」という問いかけでは認識を深める契機としては弱いからである。現代の人

間が直面している問題や矛盾を明確に提示してこそ、そこから認識をより深めることができる。問題認識的立場と課題解決的立場とが相互に連動しあうことで、より深く総合という立場を構築していけるのではないかと考える。

現実問題にあてはめれば、目の前で進行する動きとしての急速な「繁栄と発展」において、私たちは地球環境問題を筆頭に自己の存在基盤を突き崩していく事態をひき起こしている。自分たちの存在についての根源的な理解がないまま、自身がこの世界で存続できなくなる事態を引き起こす、こうしたことが自己の存在認識の困難さを象徴している具体例だと思われる。(以下、用語の使いわけでは、個々の存在を意識する際は人間を、集団ないし全体として考える場合は人類を使用する)

人類としての活動は、手足(道具・機械)の延長、頭脳(情報系)の延長、大地の延長(自然改良)として特徴づけられる。人間とは、時空をまたいで世界を認知し、関与し、改変し、そこに集合的な組織と人為的空間としての人間社会(政治・経済・文化複合体)を創り出してきた。しかし世界を対象化し、関与し、操作することは、自分自身をも操作対象としていくことに通じる。それはちょうど人間が野生生物を家畜や作物として囲い込んで飼いならしてきた動きに対比するならば、それは集団内で自己自身を囲い込んで飼いならしていく自己家畜化現象とでもいうべき動きとしてとらえることができる(小原 2000)。

人類は長い進化の道を歩みながら、自己と世界を見出し、編成し、さまざまな姿に構築してきた。その歴史や社会を振り返ると、認知能力を外的関与の力として拡大させながら、不安定で不確定な存在を何とか安定化させる道を進んできたかにみえる。しかしながら、改変する力をより強化(外向的発展)してきた反面で、不安定で脆弱な存在である自己の在り方の限界性に向き合うこと(内向的発展)ができていないのが実態ではなかろうか(古沢 2016)。

具体的に、現代の人類が直面している問題(課題)を大きく集約して提示するならば、筆者は以下の4つの 課題としてこれまでとらえてきた。

第一は、私たちの生存を基本的にささえている"生存環境の危機"。第二は、私たちの生活をささえている経済システムがはらむ矛盾すなわち"経済的危機"。第三は、社会組織の高度化にともなって生じてきた一種のヒエラルキー化と管理化がもたらす"社会編成の危機"。第四は、現代人の精神世界の稀薄化と人間性の疎外にかかわる"精神的(実存的)危機"である。それぞれについては相互に深く結びついたものとして展開している。その内容については、とくに第一の危機(環境)と第二の危機(経済)に関しては、ある程度の内容の掘り下げをこれまで行ってきた(古沢 1986、1995、2008、2016)。

問題の特定を上記のように4つに分類して提示してきたのだったが、総合人間学を考えるにあたっては、内容を吟味すると3つの次元の問題として整理したほうが全体像を把握しやすいと考えるに至った。すなわち、上記の第二と第三は、人間がつくる社会構成体に関する問題としてひとくくりにとらえることができる。それは社会的存在としての矛盾であり、そこでは社会組織編制の側面と経済関係形成の側面の二つの面で生じている問題ということである。すなわち、まとめて3つの次元として提示しなおすならば、①生存環境の危機、②社会・経済的編成に関する危機、③実存的危機の3つとなる。

この3つに分けた大きな問題設定と連動して、自然界における人間の位置と存在様式をどう認識するかについて、考えていくことにしたい。3つの次元で問題を明確化しつつ、人間存在をとらえなおすことで、問題の核心にせまれるのではないかと考える。

3. 人間存在を3層構造としてとらえる

3つの次元での人間の存在様式は、空間的、時間的なイメージを加味すると、次のように提示できる。

人間(私)が今ここに存在している(個的存在)のは、社会経済的な関係性の上に生活を維持できていること(社会的存在)、さらに生物として物理的に存在する地球・宇宙の中で存在が基礎づけられていること(生物的・物的存在)、こうした組み立ての上に人間は成り立っているのである。

これを、もう少し厳密に表現しなおすと、私たち人間の存在様式は、次の3層として描くことができる。すなわち、①生物・物理化学的存在(いわゆる客観的とされる存在)、②人間集団としての構成体(独自の秩序形成としての社会・経済・政治的存在)としての存在、③私としての存在、すなわち個別に主観的世界をもつ中で、共通性を維持する認識存在(共同主観的世界)であり、「文化・心象的世界」を構築しつつ共有しあう個的存在である。(図1参照)

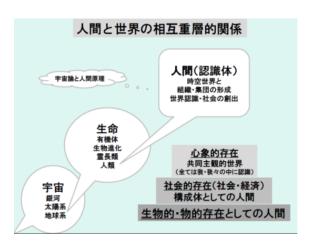


図 1

ここで、①と②は比較的理解しやすいとらえ方だが、③は主観と客観のとらえ方という点で矛盾含みの領域である点に注意したい。すなわち、人間自身が自己の存在様式を認識すること(メタ認識)は、根源的困難を伴うことへの自覚である。単純化したイメージ図(図1)で私達の存在様式を示したが、生物的・物的存在の基盤(客観世界)の上に、社会的存在としての人間集団とその構成体の一角において私達一人ひとりが在り、それは共同主観的世界として共時的に構成・共有したものとして世界が形成されていることを示している。

「われ思う、故にわれあり」(デカルト)はよく引用される言葉で、さまざまに解釈されるが、世界はわれわれの認識において成立しているという解釈がなりたつ。この認識世界は、あくまで個人の主観的認識世界において構成され唯一無二の絶対的な存在なのであるが(個としての尊厳性)、それ自体が悠久の歴史的蓄積の上に形成されている通時的存在(個の中に全を含む)でもある。自ら(主体)が働きかけ、創り出している世界(関係性の総体,客体であるとともにある意味で観念的世界でもある)に、自らが逆に組み込まれている存在様式として、ここでは表現しておこう。つまり、主体・客体の無限連鎖系、そこに個ならびに群としてより高次の相関系を形成している存在形態である。こうした存在様式を掌握すること、その困難さについての自覚をまずは基本的出発点としたい。

このイメージ的図式(図1)は、個人という存在を成り立たせている土台としての立体的な構成図式(図中

の右下の3段図)であるが、それは同時にその存在が時間的な歴史性をふまえて成立している様子(図中の丸の図の流れ)を示している点に注意していただきたい。

この3層において人間という存在を位置づけることによって、重層的な存在様式がある程度イメージしやすいのではなかろうか。相互関係をもちつつも、それぞれの領域では独自の秩序形成(構成原理・法則性)が貫かれている様子についても理解することができる。各領域は、いわゆる階層性ないしは大きな断絶を伴っているので、問題認識や状況分析においては、どの領域の問題をどういう立場からとらえているのか、慎重に見きわめて理解をすすめる必要がある。

つぎに時間的な経緯をより明確に理解するために、図2を作成して示しておこう。この図において、各領域は、時間的にも空間的にも巨大な独自の領域性をもっている様子を、私たちの通常感覚としての距離認識の指標で示した。この距離・空間的なイメージを思い描くことで、各領域は階層性ないし大きな断絶をもつことが理解できるだろう。

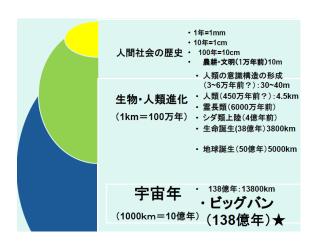


図 2

4. 人間(私)を支える3層構造

以上のごとく、人間存在を巨視的な視点から位置づけることで、総合的な人間像を描くことを試みた。こうした理解を、今度は個的な人間存在(私)についてあてはめると、図3のような図式を示すことができる。いわば、個的存在の中に社会的・歴史文化的歩み、人類史的歩みが凝集されて組み立てられている様子を示した図である。

こうした存在図式を思い描くに至った契機は、2011年の東日本大震災とその後の復興をめぐる動きに接してきたことにある。すなわち、人間の在り方には、表層としての日常生活(個的存在)とともに、その底層に脈打っている潜在的在り方(通時的・共的存在)があり、存在が大きく揺らぐ事態においては底層に隠れていた通時的・共的な存在様式が大きな力として出現してくるのではないかということへの気づきである。自分という個的な存在の奥底ないし基底に隠れていた、より深い所にある歴史的・伝統的・文化的な蓄積が再生し蘇るさまを実感することで、自己の狭い枠組みを乗り越えるといったらよいだろうか。自分一人の存在では如何ともし難い状況下で、こうした潜在的な力のもつ可能性が出現してくるということは大変興味深いことである(古沢 2014)。

先に示した図1とこの図3とは、相補的な関係にある。図1は客観世界における人間個人についてその成り立ちの在り様を示したものであるのに対し、図3は人間個人の中に世界や宇宙を含み込んでいる様子を示したものである。



図 3

興味深いことに、こうしたとらえ方は、スイスの精神科医カール・グスタフ・ユングが創始した深層心理学理論と共鳴しあう部分が大きい。すなわちユングは、人間心理の深層において集合的無意識の存在や人類が共通に持つ元型の概念を提起している(ユング 1970)。こうした心理学分野での最近の興味深い問題提起としては、ケン・ウィルバーのトランスパーソナル心理学がある。自己拡張と世界認識をめぐる独自の視点を提起しており、別途で詳細に検討したい人物である(ウィルバー 2004)。

人間の存在論的な分析や考察は、これまでも数多く展開されており議論多き分野であり、その全容を理解することは筆者の力量では難しい。今回のエッセイでは、こまかい検討にまで踏み込むことはできず、人間存在をどう位置づけるかに関する私的なラフ・スケッチを提示するにとどまるものである。ここで、ひとまずはラフな論述をいったん中断することにして、次回へのつなぎをもう一言つけくわえておきたい。締めくくりとして、総合人間学をどのように構想するかに関して、既存の学問分野との関連性を、たたき台的な図式として図4を示しておきたい。これは、既述した3つの次元について、既存の学問分野をあてはめて編成してみたものである。それぞれの学問分野については、より詳しく内容を吟味する必要があるのだが、今回はラフ・スケッチとして提示するにとどめる。

以上、あくまでも議論のためのたたき台として、大まかな見取り図ないしはプラットフォーム形成への手がかりを第1段階として描いてみた。今後に向けて、読者からのご批判、補足、コメントを期待したい。

注

本稿に関連する具体例などについて単行本、『食べるってどんなこと? あなたと考えたい命のつながりあい』(平凡社、2017年11月)、『みんな幸せってどんな世界 共存学のすすめ』(ほんの木、2018年3月)を執筆したので、ご一読頂ければ幸いである。



図 4

参考文献

青木薫(2013)『宇宙はなぜこのような宇宙なのか―人間原理と宇宙論』、講談社

小原秀雄(2000)『現代ホモサピエンスの変貌』、朝日新聞社

K.G. ユング (1970) 『こころの構造』(ユング著作集 3)、日本教文社

K. ウィルバー (2004)『統合心理学への道』松永太郎訳、春秋社

K. ウィルバー (2008)『インテグラル・スピリチュアリティ』松永太郎訳、春秋社

古沢広祐 (1988)『共生社会の論理』、学陽書房

古沢広祐 (1995) 『地球文明ビジョン』、日本放送出版協会

古沢広祐 (2008)「自然・人間・社会の総体関係をどう見るか―食・農・環境の視点からの考察」『総合人間学 8』、学文社

古沢広祐 (2014) 「3.11 震災復興が問う人間・社会・未来」『総合人間学 8』、学文社

古沢広祐 (2016)「人類社会の未来を問う」『総合人間学 10』、学文社

松井孝典(2017)『文明は<見えない世界>がつくる』、岩波書店

[ふるさわ こうゆう/國學院大学/持続可能社会論]